

ああ！ 硫黄島

石川県 宮村長夫

私は、昭和十六年五月ごろだったと思いますが、河北郡内の海軍志願予定者を集めて、津幡町の公民館で海軍の下士官の服装をした人が、二人いて、釣り床の使い方、その他、手旗信号の練習を教えてもらったことがあった。

同年九月、海軍志願兵の受検検査が同郡高松の小学校で行われたので参加した。第一次志望飛行兵と記入し、第二次、第三次希望は書かなかった。この海軍志願兵には合格し、我が川北村からは合計四人の青年が合格した。

翌年二月、私に「舞鶴海軍航空隊に第二次試験を行うから出頭せよ」との通知が来た。他の三人は第一次試験の合格通り、そのまま、海軍軍人として合格したのである。

二月上旬、私は単身、舞鶴航空隊へ出頭した。

場所は舞鶴から駅四つほど先の栗田という所で、ここには水上機の航空隊があった。試験の期間は五日間で、科目は「身体検査」「知能検査」「適性検査」「口頭試問」等であった。学科試験はなかったと思う。

その五日間の試験期間中、不合格者は、その都度、家へ帰された。私は最後まで残ったが、少しホームシックになりかけ、最後の問題二、三をわざと違わせ、合否どちらでも良いという思いで家へ帰った。二月上旬、栗田地方は大雪が降り、大変困ったことであった。

そして試験のことなど忘れていた同年四月上旬、一通のハガキが家に届き、それは「合格」の通知であった。それには「昭和十七年五月一日、土浦海軍航空隊へ入隊すべし」とあった。川北村からは私と広谷良信君は五月一日、後の二人は九月一日入隊で、私以外は皆舞鶴海兵団であった。

石川県からは、私のほかに八人の入隊者が、県の兵事係りに引率され、金沢駅発七時三分の上野

行き急行列車で出発した。

昭和十七年五月一日、土浦海軍航空隊へ、同期四百人が乙種第十八期飛行予科練習生として入隊した。乙種第十二期の偵察分隊がいたが、操縦分隊は卒業していなかったと思う。第十二期の人たちには、入隊時に大変世話になったことが思い出される。甲種の人たちは第七期以下の人がいたと思う。特に私たちに近い四月に入隊した甲種第十期の思い出がある。

この期は、特攻機・敷島隊関幸男大尉の二番機、三番機として敵空母に突入した中野及び谷暢夫の両勇士を出した期である。ともかく私たちの乙種第十八期は、他の期の戦友たちに負けずに頑張ったものである。

そして半年後、操縦分隊と偵察分隊に分かれたのであった。私の偵察分隊は、三重航空基地へ移動したのであった。そして昭和十九年三月、私たち偵察分隊は操縦分隊と別れて徳島航空隊へ入隊し、猛訓練が実施されたのであった。

後期の七月、八月は、最終工程である白菊での飛行作業の苦しい教程が終わった。

一つの例を挙げると、真夏の暑苦しい最中に飛行服を着け、ジャケットを着け、上から落下傘バンドを付け、飛行靴を履き、手にはバッグを持ち、飛行場を一周、距離は六キロぐらいであったと思う。

また飛んでいる飛行機の中での前支えや、飛行後の地上で操縦教員からの鉄拳で殴られ、血が噴き出し、飛行服の前が真っ赤に染まったことなど、そのほかにも忘れられないことが多くあった。

昭和十九年九月、ようやく飛練教程を卒業し、同期数人と共に木更津航空基地へ転出したのであった。

庁舎の屋上には寺岡中将の中将旗が翻り、第三航空艦隊司令部付きの飛行隊があり、最初は硫黄島の所在がどこであるか分からなかったが、飛行機で南へ四時間三十分、初めて見るこの島は、全島穴だらけの空爆の跡も生々しく、無残な姿であった。

この硫黄島は、内地よりサイパンの方が近いのである。そして硫黄島の周辺には敵の潜水艦が潜むため、連絡は空路しかなく、その後、十三回の要務飛行が始まったのであった。

### 【解説】

爆撃が終わり、敵機が去った。

地下壕から水交社へ戻ると、近くで鶯が鳴いていた。このわずかの間が守備隊兵士たちの安らぎのひとつときであった。当時、木更津海軍航空基地には第三航空艦隊の司令部があり、直属飛行隊の關係上、硫黄島への要務飛行には十三回参加した。父島へ夜間、暗い中に降りたこともあった。

いろいろなことに出会ったが、最後にはトラック島へ飛んだペアの帰りを待ち、木更津へ着いたが、その三日後には米軍は硫黄島へ進攻したことを考えるとき、まさに間一髪であった。

昭和二十年二月十九日、米軍は艦船八百隻、航空機延べ四千機以上をもって進攻してきた。艦砲

の射出鉄量一万四千五百トン、投下爆弾千トン、海兵隊は三個師団の六万五千人が上陸した。

激闘三十六日間、孤立無援、栗林中将以下守備隊二万二千人は玉砕した。地獄の戦場と呼ぶごとく、米軍も同じく二万人の死傷者を出したのである。

その後、私の同期のものが海上自衛隊硫黄島駐屯地司令として勤務していた時、洞穴へ降りてみて驚いたという。そこには無残な死屍が類々で、無数の遺骨が散乱した光景があったという。

彼は、全部地上へ上げ、慰霊祭を実施したことである。一生の思い出の残る硫黄島であったという。

思えば三年四カ月の兵歴ではあったが、少年期の一時期を国の危機に捧げたことに悔いはない。ただ幼くして散華した多くの同期生の魂を思うのである。